

## (7) 「天にのぼり」

村上 伸

出エジプト記 40 章 34 節-38 節  
使徒言行録 1 章 6 節-11 節

今日は「天にのぼり全能の父なる神の右に座したまえり」というところについて話します。全体を説教の題にしてもよいのですが、ちょっと長いものですから「天にのぼり」としましたけれども、扱う事柄としてはこの全体を扱う積もりであります。

復活されたイエスが四十日の間弟子たちに現れて、神の国について話をしたということが、使徒言行録 1 章 3 節にかいてあります。「イエスは苦難を受けた後、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。そしてその後、6 節以下が続くわけですね。

そこに、イエスが天に上げられたことが書いてあります。「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」(9 節)これがイエスの昇天とよばれる出来事であります。

ところが、新約聖書の中では、はっきりと昇天について書いてあるところはあまりたくさんはありません。ルカが、福音書と、使徒言行録を書いたのも同じルカなんですけれども、その使徒言行録の最初の部分に、わりに簡単に書いています。

念の為に福音書の方をみますと、ルカによる福音書の 2 章の 50 節にこう書いてあります。「イエスは、そこから彼らをベタニヤの辺りまで連れて行き、手をあげて祝福された。そして祝福しながら彼らを離れ、天に上げられた。彼らはイエスを伏し拝んで後、大喜びでエルサレムに帰り、絶えず神殿の境内にいて神をほめたたえていた。」これが、天に上げられたというルカの福音書の記述でありまして、わりに簡単なのですね。

それからマルコがやはり福音書の終わりの部分でそのことを記しております。16 章 19 節です。「主イエスは弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた。」ここでは殆ど使徒信条と同じ言い方で、天に上げられて神の右に座られたと書いてあります。非常に簡単な書き方です。これ以上詳しい記述は、ほかにはないのです。

そこで、新約聖書そのものが、イエスが天に上げられたことを詳しく記していないのだから、これはもしかしたらイエスを神格化するために、もともとは大変簡単な言葉であったものを少し広げて拡大解釈し、神格化していったのではないか、というような意見も出てきました。

西洋の絵をいろいろ見ますと、レンブラントでもそうだし、それからエル・グレコなんかでもそうですけれども、昇天を描いた絵はかなり詳しい。イエスが白い衣に包まれて、天に昇って行く場面が描かれています。そして足元に雲が描かれて、雲が足台になっているのです。そしてその下に羽根の生えた天使がたくさんいて、イエスを持ち上

げて天に昇っていく。このようにしてイメージをふくらませることが、後代にはたしかに起こりました。けれどもこれは、イエスを神格化するための神話であると単純にみるわけにはいかないのではないかと私は思っています。真実が何かこの中にあるのではないか。今日はそういうお話になると思います。

天に昇って全能の父なる神の右に座したもうたという使徒信条の記述の中には、やはり相当重要な意味があるのではないのでしょうか。そこで、先程読んで頂いた旧約聖書の一節を引いてみたいと思います。それは出エジプト記の一番最後の部分です。私はこの部分と、福音書の末尾、或いは使徒言行録の最初の昇天の記事との間には見逃し難い類似があると考えています。

出エジプト記の方はどういう話かと言いますと、エジプトを脱出したイスラエル民族が指導者モーセのもとに砂漠の旅をずっとしているわけですが、シナイ山でヤハウェと呼ばれる神から「十戒」を受ける。「十戒」を中心とする神の律法、或いは戒めを頂いて、民族は全体としてその戒めに従って生きていくべきであるということが、はっきり致します。つまり、ただの地縁、血縁による民族の集団としてではなく、信仰的な共同体としてこれから生きていくんだという体制を整えるのですね。

出エジプト記の 35 章にはその体制作りについて書いてありまして、具体的に言いますと幕屋の建設です。幕屋を作る。そしてその中に至聖所というものが出来る。その至聖所の一番中心に、神から頂いた十戒の二枚の石の板がおさめられるということです。ですから信仰的な共同体として、これから生きていくのだというその体制が整った。その時に「雲は、臨在の幕屋を覆い、主の栄光が幕屋に満ちた」（34 節）と書いてあります。そのあと続けて読みますと「モーセは臨在の幕屋に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、主の栄光が幕屋に満ちていたからである。」雲がその上にとどまっていたので、モーセでさえもその幕屋に入ることが許されなかった。「雲が幕屋を離れて昇ると、イスラエルの人々は出発した。旅路にあるときはいつもそうした。雲が離れて昇らないときは、離れて昇る日まで、彼らは出発しなかった。旅路にあるときはいつも、昼は主の雲が幕屋の上であり、夜は雲の中に火が現れて、イスラエルの家のすべての人々に見えた。」そんなことが書いてあるのですね。

私はここを読んで非常に惹かれるのですけれど、もうひとつ意味がはっきりしないなあというもどかしさを感じていました。調べてみますと民数記にもう少し詳しい記述があります。これは民数記 9 章 15 節以下です。「幕屋を建てた日、雲は掟の天幕である幕屋を覆った。夕方になると、それは幕屋の上であって、朝まで燃える火のように見えた。この雲が天幕を離れて昇ると、それと共にイスラエルの人々は旅立ち、雲が一つの場所にとどまると、そこに宿営した。イスラエルの人々は主の命令によって、旅立ち、主の命令によって宿営した。雲が幕屋の上にとどまっている間、彼らは宿営していた。雲が長い日数幕屋の上にとどまり続けることがあっても、イスラエルの人々は主の言いつけを守り、旅立つことをしなかった。雲が幕屋の上にならずに日数しかとどまらないこともあったがそのときも彼らは主の命令によって宿営し主の命令によって旅立った。雲が夕方から朝までしかとどまらず、朝になって雲が昇ると、彼らは旅立った。昼であ

れ、夜であれ、雲が昇れば彼らは旅立った。二日でも、一か月でも、何日でも、雲が幕屋の上にとどまり続ける間、イスラエルの人々は、そこにとどまり、旅立つことをしなかった。そして雲が昇れば、彼らは旅立った。」ちょっとくどいくらいに雲がとどまるとか、昇るとかということが書いてあって、その後で決定的な言葉が出てきます。「彼らは主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立った。」つまり雲というのは、神のしるしなのですね。雲がとどまるというのは、神がそこに宿営することをのぞんでいらっしゃる、そういうことのしるしとして、そこにとどまっているということのようであります。

これは簡単にいうと、こういうことではないでしょうか。雲というのは神様をかくしているものです。聖書の中では絶えずそういうふうに使われます。雲というのは神を見えない存在として私たちの視覚から遠ざけている、それが雲ですね。ちょうど私たちが雲がかかると太陽を見ることが出来ないとか、雲がかかると、星を見ることが出来ないとかいうのと似ていますが、聖書の中で雲が出てくるときにはいつでも神がそのかげにかくれていらっしゃる、しかし隠された形であるけれどもたしかにそこにいらっしゃる。聖書の中ではそのしるしとして雲がしばしば出て参ります。ですから雲というのは隠されているけれども確かにそこに神様がいらっしゃる、そのことを表す聖書的用語であると考えるとよろしいでしょう。

神は隠されてはいるけれども、常にイスラエル民族とともにある。宿営すべき場所もそういうふうにして示されるし、出発すべき時も雲が離れるという形で示される神は隠されてはいるけれども常にイスラエル民族とともにある。宿営すべき場所を示し、出発すべき時を示す。こういうことであります。

そこで私は大変考えさせられたのですがイスラエル民族がエジプトの捕囚の地から解放されたというのは一回的な出来事ですね。しかし、それからその同じ出来事が、いつまでもいつまでも繰り返されるということはないのでして、その一回的な出来事が起こった後、イスラエル民族は自分たちの生活を営んでいかなければなりません。つまり歴史です。一回的な出来事が始まりにあった。しかしその後で長い歴史が続くのです。これは、私たちの生活でもよくあることでして、例えばあの学校に入りたいと思って入学試験を受けて受かった。学校に入学できた、これは確かに一つの喜ばしい出来事です。しかしその後で嫌でも毎日勉強しなければいけないとか、色々な経験を重ねていかなければいけないとかいうように、歴史が続きます。私たちの生活は常にそうです。ある出来事によって何か始まるのですけれども、その後忍耐強く毎日の暮らしを続けていかなければいけない。いわば歴史が始まります。結婚でもそうでしょう。結婚した、それは確かに喜ばしいことかもしれませんが、その後歴史が始まる。毎日の暮らしですね。そこでは忍耐が必要になるでしょうし、色々なことが起こります。或いは就職ということを考えてもそうかも知れません。望んでいた会社に勤めることが出来るようになったとか自分の望んでいた仕事が出来たとき、確かに喜ばしい出来事ではありますが、その後で長い歴史が続きます。その歴史を私たちは営んでいかなければなりません。イスラエル民族もそうだったのですけれども信仰的な共同体として、これから生きていかなければいけない。そのときに神から与えられた戒めというものを中心にして、それを守って生きていこう、それを大切にするために幕屋というものを作ろう、そこか

ら始まったわけですね。ですからこの出エジプト記の最後の部分というのはイスラエル民族が信仰的共同体としてこれから歴史を形成していくというそのときに、本当に必要なこと、つまり神はその歴史の中で目には見えないかもしれないけれども、常にいましたもう。見えざる神がともにいましたもう。そしてその主の命令によって宿営し主の命令によって旅立つという生き方をしていくのだと言う事です。出エジプト記の最後のところにこの記事が出てくるということは、そういう意味をもっているのではないのでしょうか。

使徒言行録が書いていることも、結局それと同じことだと私は思います。新約聖書では、先程も言いましたようにマルコとルカが「昇天」について書いておりますが、一番最後のところにそれが出てきます。つまりイエスの地上の生涯は、本当に一回的な出来事としてあった。そして人々はそれを経験した。しかしその後で彼らの歴史が始まる。彼らは毎日の暮らしの中でイエスから受けたものを生かしていかなければいけない。主とともに、主の命令によって宿営し、主の命令によって旅立つという生活を続けていかなければならない。歴史が始まる。そのことを表すために、昇天という出来事がここにおかれているのではないか。

今まではイエスを身近かに感じていた。彼の言葉を聞いたり、彼のわざを見たりしていた。しかしそういう時は終わったのだ。これからはイエスを目で見ることが出来ない。しかも、そういう状態の中で毎日の生活を私たちは続けていかなければならない。そのときに何を信じるか。そういうことなのだろうと思います。

基本的には、出エジプト記の一番最後に書かれてある雲の話と、福音書の最後に書かれてある昇天の記事とは同じなのではないかと思えます。そここのところをもう少し、繰り返すようになりますけれども、申し上げたいと思えます。

イエスが生きておられたとき、そして復活後の四十日間、この間はイエスの姿は見られました。弟子たちはイエスの姿を見、イエスの声を聞き、そして時にはイエスの手に触れ、そうやってともに生きてきたのです。神のみ心によって人となったイエス、死の陰の地といわれるようなガリラヤで苦しむ人々に神の国を宣教したイエス、すべての人を愛して彼らの苦しみを担ったイエス、そしてすべての人々の罪をご自分の身に負って十字架上で罪人と一緒に絶望的な死を死んだイエス、だが三日目によみがえったイエス。あの命に満ちた力というものは、決して過ぎ去ったのではなく、今も生きて働いているということをイエスは四十日間にわたって子たちに現れて実証した。このように、イエスの生前と、復活後の四十日間は、いつでも、どこでもイエスの姿は見られました。

しかし、イエスが目に見える形で弟子たちとともにいられた時はいつかは終わらなければなりません。いつかはイエスがもはや目には見えなくなるときが来ます。歴史的になるということはそういうことです。一回的な出来事としてのイエスの事件が起こった。しかしその後の長い歴史の中では、もうイエスの姿は見えないのです。歴史的になるというのはそういうことです。「天に上げられた」というのは先ず、そのことを意味しているのではないか。

使徒言行録 1 章 9 節に、「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて、彼らの目から見えなくなった」とあります。イエスの姿が見えなくなる。それ以来ずっと今に至るまで、イエスの姿は見えません。私たちは、イエスの姿が見えない時代に生きています。つまり、歴史の中で私たちは生きています。私たちの目には見えない形で存在するという時が始まったのだ。「天に上げられ雲に覆われて見えなくなった」という言葉はそのことを意味しているのではないのでしょうか。しかし見えなくなったからといって、イエスは弟子たちと離れたかということ、決してそんなことはありませんでした。目にはもはや見えないけれども、常に彼らに伴って、彼らとともにおられました。この点でさっきの出エジプト記と昇天の記事とは一致します。旧約聖書の記事は、神は雲に隠された形ではあるけれども、常にイスラエル民族とともにいて宿営すべき場所や出発すべき時を示したと書いていますが、使徒言行録の方ではイエスが、信仰的共同体として新しい出発をとげた弟子たちの上に聖霊が降ると約束します。

7 節にこう書いてあります。「イエスは言われた。『父がご自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そしてエルサレムばかりではなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。』」これが昇天されるにあたってのイエスの約束でした。

この歴史的時代、つまりイエスの姿をもはや見るができない時代、しかし私たちがこの歴史の中で、彼の言葉により、彼の愛によって生きていかなければならない時代、この歴史的な時代の中で必要なことは何か。聖霊が私たちに与えられる、イエスはそう約束します。「あなたがたは力を受ける、そして地の果てに至るまでわたしの証人となる」というのであります。

ですから、この見えなくなったということは弟子たちにとっては、決して否定的なことではありません。彼が天に昇ったということは、使徒信条が書いているように、「全能の父なる神の右に座った」ということです。この「天」とか「神の右」とかいうのは、ある特定の場所を意味する言葉ではない。

多くの画家たちは、それこそ文字どおり天の上に昇って行くという形で描きました。エル・グレコの絵がそうですね。ここで本当は絵をお見せしながらお話しするとすぐ分かるのですが、グレコの絵はいつもそうですが、特に昇天の絵は縦に長くて、高く天にむかって昇っていく。勿論そういうふうにも考えてもいいわけなのですが、聖書が語っている天は単なる場所ではありません。そうではなくて、ある神学者が申しましたように機能・働きです。そこからイエスが神の力を我々に取り次ぐことが出来るという機能をイエスは引き受けたのです。「全能の父なる神の右に座った」というのはそういう意味でしょう。

イエス・キリストは神の力を取り次いで私たちにおくる。「聖霊が降る」というのはこういうことです。ですから「あなたがたは力を受ける」と約束します。その力とは何かというと「エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリヤの全土で、また、地の果てに

至るまで、わたしの証人となる」と言うことです。キリストの証人として、どんな所においても力強く生きていく。そういう力をあなたがたに与える、それが聖霊です。「聖霊が降る」というのはそういうことなのです。そのことがここでいわれていることの内容ではないでしょうか。

ですからキリストが天に昇ったということは、どうでもいいようなことではなく、或いは単に神話的な表現という程度のことでなくて、大変大事なことです。

カール・バルトによりますと、キリストが天に昇ったことによって、今や「教会の時代が始まった」と言います。この地上で教会は「イエス・キリストの体」とであると聖書が述べているように、イエス・キリストは天にいらっしゃる。しかしこの地上では、教会をご自分の体として働かせる。だから彼が天に昇ったというのは、天で歴史的にちゃんと存在しているということなのだ。そして教会はイエス・キリストが、地上でもちゃんと生きていくことの形なのだと申します。「天的歴史的存在」、「地上的歴史的存在」という言い方で説明しますが、私はそれで大変納得しています。

キリストは天で生きていらっしゃる。しかしそれだけではない。この地上で教会を通して、或いはエクレシアを通して、或いはキリストを信じる者たちの群を通して働かすもう。そしてその群に力を与える、至るところで証しをする、そういう力を与える。それが聖霊を授けるということでもあります。

私たちの目には見えないけれど、ちゃんと生きておられるそのキリスト、そして私たちとともにいる、私たちが宿営すべき所、出発すべき時、それを私たちに示し先立って導いていかれる。そして私たちを力ある証人として生かして下さる。そのことが今やはじまったのだ、「天にのぼり全能の父なる神の右に座したまえり」というのはそういうことを私たちに示している言葉だと思えます。

(日本基督教団みくに伝道所 1997年1月26日 礼拝説教)